実践報告1　山口大学の実践

畑　地　正　憲（山口大学共通教育センター長）

ただいま御紹介にあずかりました畑地でございます。本日私がここに立つことになりましたのは、おそらく雑誌『IDE－現代の高等教育』№425の中で山口大学におけるFDの実践について紹介したことが1つのきっかけではないかと思います。本日のフォーラムの主題にFDをどう組織化するかという大きな問題提起がございますので、山口大学でのFDに関わります段階でどういうことを考えてFDに取り組んで来たかということを、まず少し時間を頂きまして紹介いたしたいと思います。

私は、先ほどの経歴の紹介にもありましたように、昭和36年に大学を出まして公立学校の教員に就職いたしました。36年の頃といいますのは、皆さんはご承知かと思いますが、勤務評定の問題が非常に深刻になっていく時期でありましたし、教育状況としましてはカウンセリングによる児童生徒の心的指導の深化と授業に対する関心・理解を高めるために視聴覚教育をもっと中学・高校等の教科指導の中に導入していかなければならないという時期でもあったわけです。ところで、私自身の専門は東洋史専攻でありまして、教養教育のことには全く関係のない立場という意識で大学に就職してきました。しかし、教養部の廃止にともなう共通教育センター長への就任によって、若い頃に視聴覚教育の推進を経験したということが、教授法の改善への関心を強くもったと考えてよろしいかと思います。それから、今から14年程前、1985年の頃だったと思いますが、在外研究でハーバード大学に行きました。もちろん研究テーマは専攻の東洋史のテーマであり、アジア研究の中心機関であるフェアーバンクセンターに所属して研究に専念いたしました。ハーバード大学で実は専門とは別の素晴らしい2つの経験をいたしました。その第1のことは、中央図書館であるワイドナー図書館で、図書館学に関する図書館司書の資格・昇進のあり方を学習する機会を得ました。アメリカの図書館の司書というのは資格が3段階程に分かれておりまして、最上級のプロフェッショナル・ライブラリアンという資格を得るまでには継続的な研修を積まなければならないという事実を1つ勉強いたしました。もう1つは、ハーバード大学にユニバーシティ・カウンシルという組織がございまして、そこは日本で言いますと学生部に関係する仕事をやっていると考えてよいようです。このカウンシルで色々と情報交換しているとき、教授法研究としてのFDという言葉を耳に致しました。まさか自分がFDに関係するとはその時は全く思っていなかったわけですけれども、FDという言葉を最初に耳にしたのはその時であったのです。また今、日本の国立大学でもアドミッション・オフィス（AO）という組織創りに取り組もうとしていますが、ハーバード大学が推進している学生選抜に関するAOのことも大まかに知る機会を得ました。こういった経験というのが、山口大学においてFDを実践する役割を担った時に私の意識の原点となったと言って良ろしいかと思います。

私自身が、山口大学の全体的な教育改革というものに取り組みましたのは、だいたい平成5年からでございます。山口大学の場合は、平成8年から教養部を発展的に廃止いたしました。その段階では教育改革の必要性ということにつきましては、ここにご出席の京都大学の田中毎実先生にもお世話になったことがありますけれども、教育改革がなぜ必要かということをめぐって、教育改革を先発していた諸大学の先生方に講演を頂き、大学の同僚達と色々と議論いたしました。ところが、講演会というのは意外と一過性であるということを痛感いたしまして、効果がないということではなくて、よりお互いに勉強する機会というのをもっと我々は持つ必要があるではないかと考えました。そういう考えを持っている時に、私はセンター長という役をおおせつかるということになりました。センター長になりました時に、これからの大学において、研究については、我々は大学の教官ですから個人の責任として推進していくだろうが、しかし、教育という点については教育改革の段階で色々と問題点が指摘されており、その問題点を少しでも改善し、克服していくためには、より多くの教官で相互研修をする以外に方法は無いのではないかと考えました。そのための相互研修を企画・実践していくためには、大学教育に関してどういうポイントを提示して取り組んで行かなければならないかということを考えました。この提示するポイント（考え方）がレジュメの中にありますFDの企画方針および実践に関する5点であります。即ち、1，FDに関する啓蒙活動、2，カリキュラムの改善、3，教授法

の研修、４，研究に支えられた教育、５，教官の全学的意見交換などのポイントが研修会としてのFDには盛り込まれるべきと考えました。

このようなポイントを考えました理由は、FDを全学の教官の皆さんにより多く理解してもらうということがまず大事ではなかろうか、それはFDに関しては啓蒙的な役割であり、それをまず組まなくてはいけないだろうということが第１点でありました。

次に、大学教育という角度から見ますと、FDを推進していくためにはどうしても教育内容に関わるカリキュラムの改善ということは避けて通れないだろうと考え、カリキュラム改善に関する相互研修を企画しました。

それから３点目としては、視聴覚機器やメディア機器などの教育機器を利用するということ１つを取りましても十分と言えるのか。、我々は意外と講義一辺倒に陥り易く、要するに教壇上からどんどん知識を投与すれば良いというような知識注入型の教育になりがちではないか。このような点を改善することが出来ないか。そのためには、教育機器などの利用に関するノウハウも取り込んだ教授法に関する研修ということをやはり組み込む必要があります。

ところで、この教授法に関する研修を組み込んで行くためには、授業を受けている学生が教官の授業をどのように受け止めているのかということを具体的に認知しなくてはいけない。このためには学生による授業評価ということもきちんと作り上げていかなければならないと考えました。それから、相互研修ということを実施して行くためには、自分がどういう授業を実施し、或いはどのようにカリキュラムの展開をしているかということについても、100人おれば100色あるだろうし、それを１つずつでも良いから皆さんに紹介しなが相互研修することが必要であろう。このことは、授業に関する事例研究という形で進めることが出来るのではないかと考えました。

それから４つ目にありますのは、高校教育以下のところと大学教育の大きな違いというのはいったい何であろうかということを考えまして、それは大学教育の場合には、授業担当教官の新しい研究に支えられた教育でなければいけないと、教育だけが一人立ちしていく問題でも無いだろうというふうに考えまして、やはり１人１人の教官がより良い研究をしているということが教育に反映された時に（この点で大学では研究と教育が密接不可分である）、学生にとっても非常に魅力のある講義が出来るのではないかと、このようなことを考えました。最近の大学の教官は雑用に振り回されることが多く研究に専念できないということを良く聞きます（これからは教官の雑用はますます多くなるかもしれません）。教育の質を高めるためには、やはり研究に専念できることが必要ではないかと思います。余談ですが、私はセンター長に就任しまして学生には本当に迷惑をかけっぱなしでございましたけれども、幸いな事に３月31日付けでセンター長を降りることになりましたので、一番喜んだのは学生でした。「もうセンター長をしなくてすむよ」と話たら学生が万歳と言ってくれました。授業中断や休講で如何に学生の予定と期待を裏切っていたか。これからは、少しは学生に残された私の時間と余力を投与できるのではないかと思っています。

本題に戻りまして、この研究に専念するということはやはりきちんと図っていくべきであろう考えました。これに関しましては新しく学長になりました広中平祐学長も同じ意見でありまして、学長の助言・要請を受けながら、研究専念のための期間をプランニングし、委員会などの校務及び一般の授業などを免除することを評議会で決定しました。ただし大学院の指導に関しましては余人を以って代えがたい所がありますので、そこのところは研究専念期間ではあっても、担当の先生にやってもらわなければならないという問題が残っております。しかし、校務・授業などは全部免除し、研究に専念出来る期間として「サバティカル」を作りました。このサバティカルは平成９年10月から実施して今日に至っており、複数の教官が研究計画に基づく成果をあげています（研究成果は口頭発表を行う）。そして第５点目の問題点として、FDをプランニングする段階で考えましたのが、全学的な教官の意見の交換の場を研修では必ず設けなくてはいけないだろう。研修会には伝達講習的な側面もありますけれども、相互研修という意味では、やはり膝を交えた意見交換ということがどうしても必要だと感じました。この点に関しましては、私の独断と偏見が強く加わった側面がございますけれども、そのためにはやはり合宿という形が一番良いのではないか。もちろん合宿では時間外に当然なにがしかの酒も入ります。そうすると、人間以外と腹を割った意見交換ができるんではないか（私がそうだからそう思ったのかもしれませんけれども）と思いまして、合宿研修が企画されました。このようなFDの企画・実践プランは、共通教育の基本案を審議する共通教育センター運営委員会及び運営委員会の議を受けて全学的視点から共通教育の全学的コンセンサスを確立する共通教育委員会の協議・承認を得て実施されました。

以上の諸点がFDの本筋であるかどうかは、私は専門家ではございませんので承知していませんが、少なくとも大

学教育というものを、特に学生を常に意識する形でFDを進めて行く場合に必要であると考えました。ただし、１回のFDで以上の諸点を一挙に網羅的に実施することは出来ないのであり、年次的な段階を踏んでプランニングの中で反映させていこうと考えました。以上の諸点は、FDを企画・実施するにあたっての原点になっているとご理解頂いてよろしいかと思います。そして、こういったFDを企画・実施するには山口大学全体としては未だ発展途上の大学であります。集中的にやるという意味では１泊２日の合宿研修を組んではおりますが、全学的FDをプランニングし、提唱していくのがセンター長であるという点がありまして、大学全体としての組織化を図るということが大きな問題点になっていくだろうと思います。ただし、現在のFDの企画・実施がセンター長主導でありましても、センター長の意図を理解し、推進する委員会・教官集団があります。この集団が各学部から選出された共通教育センター運営委員会と学内措置として設置されている大学教育システム研究開発施設という組織です。共通教育センター運営委員会はFDの企画・実施案を審議・決定し、実施の実働的役割を担います。また山口大学には共通教育センターの中に大学教育システム研究開発施設という学内措置の機関を設けております。実は、この大学教育システム研究開発施設は、共通教育センターを大学教育センターに発展的に改変して省令施設を設置する目的で、共通教育センター発足当初から作った組織です。この施設に全学から３名の教官を兼担として張り付けております。兼担であるという事は、多くの教官と同様に専門の方を中心に考えますので、専門が忙しいということで、なかなか協力体制が取れないという状況にございます。しかし、やはり経験というものは強いものでございまして、３年間の実績の中でセンター教官（大学教育システム研究開発施設の兼担教官の通称）という全学的認識が年々深まって参りました。12年度からは、専従ではありませんけど、専従化という形にしようと全学的了解が得られています。そうなりますと、センター教官のノウハウ或いは力というのは、こういったFDの実践の大きな力にもなって行くといえます。センター長主導の企画をやっていきますと、どうしても教官に１から10まで頼ることが出来ません。そういった点で頼りになったのがセンター支援の事務職員です。例えば、合宿研修をする場合でもどういう場所が良いかという事を最終的に絞って行く段階で大きなヒントを出したのが事務官であったと言ってよろしいと思います。私は、お金を掛けないで、しかも参加者が集中して研修できる場所は一体どこが良いかと探しておりましたら、国立徳地少年自然の家という人里離れた山中の研修所（大学から車で大体１時間弱の所）を候補に上げたのも事務官でした。

私どものFD研修経費は、文部省から頂戴する予算以外には全学からこのFDのための特別予算を頂戴していなくて、センターの予算を遣り繰っております。ただ、９年度に関しましては学長裁量経費を実費だけ頂戴しました。９年度は、学長裁量経費の増強との関連で、文部省がFD研修のための経費を学長裁量経費に投入して配分したのです。ですから、それをすぐキャッチして学長にFD研修経費の配分をお願いしました。それ以来、今日に至るまで学長裁量経費、或いは全学からFDの特別予算というものが配分されてはいないのです。なお、合宿研修参加の先生方には実費負担（実績では５千円以内）をお願いし、後日、僅かですが県内研修費を手当てしています。12年度以降、予算配分方式が見直されるようですので、大学として必須となるFD研修に対しては、全学的な予算措置が必要となってくると推察されます。

さて、FD実践の軌跡でございますけれども、第１回の研修は９年度から始まっております。実は、８年度から開始したかったのですが、全学のコンセンサスが得られなかったのです。如何してかと言うと、共通教育センターがFDを企画・実施した場合に専門教育にまでFDの問題が関わってくると、学部の自治を犯すという各学部の意見が非常に強くて、なかなか共通教育センターのFD企画に全学がすぐに対応してくれませんでした。色々と交渉・協議しまして９年度から実施できる合意をやっと取り付けました。このことに関しても雑誌IDEの中に書いておきました。共通教育に限定してFDを企画・実施しなさいというある意味では御墨付きを頂戴したことになります（この御墨付きが共通教育に限定しましても全学の合意として重要でした）。

９年度から企画・実施したことを結果的として見ると、大学教育における教授法１つをとりましても共通教育に限定出来ないのでありまして、全学的な問題となりました。今日、各学部にもFDを展開してもらわなければならない状況に至っているということになります。９年度は、資料にありますようにFDの啓蒙ということに重点を置きました。このFDを啓蒙していくためには、各学部から第１回FDに集まって頂きます先生方に核になって頂かなければならないと思いました。実は、センターには、共通教育の授業を担当するために全学の全教官（講師以上）を登録・編成した授業科目別部会を編成しています。その授業科目別部会で主導的役割を担っている委員長、副委員長あるいは

部会長、副部会長の先生方に参加していただき合宿研修を実施（缶詰状態で）しました。

この第1回目のFD合宿研修は予想を越える効果がありました。と言いますのは、参加した先生方が学部に帰りまして、FD研修で実施した内容を報告し、学部の未参加の先生を啓蒙する役割を担うこととなりました。初回のFD合宿研修は良い結果をもたらし、それ以後、例えば各学部からFD合宿研修の参加者60～70名集める事に関しましても、各学部の協力が比較的得やすくなったという所があります。第1回のFD合宿研修会には、このフォーラムの主催者であります京都大学の田中毎実先生を講師としてお迎えしまして、田中先生が実践されている公開授業を踏まえたご講演を頂戴いたしました。私は、田中先生が公開授業において導入しておられる「何でも帳」を、研修後の授業で導入し、どのような授業効果をもたらすかということを実践しました。この実践結果は、第2回のFD合宿研修で事例研究として発表しました（教授法に造詣の深い1教授からセンター長自らしなくてもと言うご批判もありましたが）。この事例研究について話しますと長くなりますので、それはご勘弁頂きまして、要点のみ一言申し添えたいと思います。

最初は「何でも帳」というのは授業担当教官と学生との1対1の意見交換であり、学生の中には交換日記的に受け止めたものもいました。ところが、学生諸君の意見（全員のものではない）の何点かをプリントして毎時間の授業で配りましたところ、そのプリントを見た学生が、こういう見方もあるのかということで授業に対する取り組みが変わってきました。「何でも帳」には授業に対する意見・質問など何を書いても良い、提出された意見は授業で抜粋して提示すると約束しました。提出された「何でも帳」にはコメントを書いて始業時に返却します。学生は何かを書くために、授業の内容や見方といいますか、そういったことを学生が考えるようになりました。学生にとりましてはまず授業を休めない（この点で出欠点呼は不要となる）、それから何か自分が考えた事をとにかくみんなに提供したい、こういう事を考えるようになったようです。そうすると、「何でも帳」というのは（私もそこまで効果があるとは思いませんでしたけれども）、教官と学生だけの意見交換ではなくて、学生同士のコミュニケートの場に広がっていきました。最後には授業の中でこちらが問題点をポンと投げかけますと、学生同士が活発に議論し合うという場にまで発展していきました。この「何でも帳」によって、ややもすれば平板的且つ一方向的に陥りがちな授業が、多面的となり、学生は強い関心と集中力を以って係わってきました（私も学生同様でした）。田中先生は50人以下が限度だと申しましたけれども、私は100名を超える授業でそれをやってみました。ただし、コメントを書くのに大変な時間を要しました。田中先生はご存じだと思いますけど、コメントを毎時間学生から提出された「何でも帳」に書いて返します。そうすると、学生の方としては最初は自分の意見がみんなの前に出た、そういった形で最初は取り組んでくる面もありましたが、だんだんと自分達の意見を発表する場という方向に向かっていったということになります。この「何でも帳」は、以後の授業でもずっと続けていれば良いことは分かっていたのですけれども、なにせそれから後の授業が400、500人の学生を引き受けなければならないような授業が続いたものですから、質問紙ぐらいの程度でしか対応ができなくなりました。確かに「何でも帳」による授業展開は、学生の積極的且つ主体的な授業への取り組みを引き出したと言う点があり、このことを紹介頂いた田中先生に感謝している授業法の1つであります。

このような授業の実践研究、事例研究というものを2回目以降の研修から取り入れて行くことになりました。最初は私が実験的に報告致しましたが、第3回合宿研修会には理系の先生が文系学生に対する理科教育の実践記録を報告するということになりました。私としてはレジュメに書いておきました企画方針の項目1から5までを毎年網羅的に実施できるものとは思っていませんが、それぞれの年度にポイントを絞りながら進めております。特に、12年度第4回のFD研修会では、学生による授業評価を踏まえた研修会を実施するように後任のセンター長にも申し送っています。山口大学の学生数は、1学年に約2000人おりますけれども、90％を超す回答率を得た学生による授業評価を実施しました。どのような評価が出るか、評価を踏まえた授業改善のどのような提言が出るか楽しみにしています。

最後に、FD合宿研修に対する教官の反応でございます。これはレジュメにFD合宿研修に参加した教官のコメントとを書いておきましたが、賛成のコメント、反対のコメントそれぞれございます。ただし、FDに参加して良かったか悪かったかという事になりますと、だいたい良かったと考えた参加者が圧倒的でして、8割から9割の教官がFD合宿研修参加に意義を見い出していると理解頂いてよろしいかと思います。しかも、FDに失望するという事に関しましては非常に少なく、7割から8割位（全部とは申しません）の教官がFDは必要であると理解して頂いております。因みに、山口大学の教官でFDと言うことを知らない人（新任者や転勤者以外の教官で）はほとんどいないと言

えます。それから今年（11年）の場合には、FD合宿研修実施要項を参照して頂きますとわかると思いますけれども、合宿研修所と大学との間を往復して日程が分断されています。要するに、合宿研修のメリットは、１泊２日の日程ですと、合宿研修所に日程全てがきちんと組み込まれているということが成功するかどうかのキーだと思います。これが、合宿研修の場所に行ってまた大学に帰ってきて、その続きをやるなんということになりますと、はたして合宿研修をする意味があるのかということになって参ります。そういった点で、今年あたりは合宿研修の必要性ということでは、若干必要性を感じない人達が出てきているという事がいえます。合宿研修をもしお考えになるのでしたら、この辺のことは合宿研修のやり方として、やはり留意しなければならないと思います。

最後に、山口大学のFD研修の問題点でございますけれども、先程、田中先生からご指摘がありましたように、トップダウンであるという点が解消されていないということであります。そのために現在進めていることですが、各学部単位のFD研修推進委員会（仮称）のような組織をきちんと作っていかなくてはなりません。山口大学でも医学部、工学部、経済学部などではFD研修のための組織を作り、実践活動に取り組んでおり、他の学部でも検討中です（各学部でのFD実践資料もお預かりしていますので報告すべきとは思いますが、時間の制約もあり、共通教育センターが全学対象に実践しているFD研修の報告のみと致しました）。このような各学部のFD研修組織を踏まえて、全学的なFD研修を推進する委員会や協議会などが編成されたとき、共通教育センターが企画・実施してきたFD合宿研修会も、新たな位置付けと発展が期待できると思います。FD研修会を企画・実施するには、経済的裏付けが安定することは望ましいことと言えますが、経費確保や日程調整などが絶対必要条件ではなく、大学教育の充実・発展を目指すFD研修会を実施し、それに参加しようとする教官（スタッフ）の前向きの意識が最も重要であると思います。

以上、十分な報告が出来たかどうかは分かりませんが、山口大学におけるFD実践の実態の一部をご理解頂き、後ほどのご議論で、ご意見ご教示を頂ければ幸甚に思います。

どうもありがとうございました。

（注：筆者の職名は平成12年３月31日までのもの）